

カーピシー派ガンダーラ彫刻の再検討
—獅子座の形式分類をてがかりに—

上原 永子 名古屋大学

ガンダーラの仏教彫刻はギリシャ・ローマ、西アジア、インドといった様々な文化的要素を含み紀元一世紀頃に仏像を創出したことで名高い。現在“ガンダーラ”と呼称される範囲には、狭義と広義がある。狭義ガンダーラは現在のペシャール盆地周辺域のみを指し、広義ガンダーラはこれに北部はスワート、東部はタキシラ、西部はアフガニスタンの諸地域を加える。

ガンダーラ彫刻の編年についてはこれまで様々な研究が行われてきたが、未だ明確な結論を得られているとは言えない。その理由は、現存する作例の多くが盗掘によって得られたものであり、発掘調査から得られる考古学的資料に乏しいという以外に、広義ガンダーラに含まれる諸地域それぞれが、地域ごとに異なる特徴を持っているにも関わらず、それを等閑視して広義ガンダーラ全体での編年を構築しようという姿勢にある。

そこで本発表では、広義ガンダーラの中でも現在のアフガニスタン首都カーブル近郊のカーピシーを対象として編年を構築し、他地域とどのような時系列的関係にあるのかを検討することで、ガンダーラ彫刻編年に新たな視点を提供することを目指す。

カーピシーの彫刻作例は、強い正面性や頭部と手足を大きく表す人体表現、仏像の肩から炎を発する炎肩、数多ある仏伝の中でも「燃燈仏授記本生」の主題を特に好むといった特色を有することからカーピシー派ガンダーラ彫刻とも呼ばれる。カーピシー派はその硬直した人体表現から従来の研究においては広義ガンダーラ彫刻の中でも彫刻技術の衰退した後期～末期のものと考えられてきた。近年こうした見方を排除し、カーピシー派仏教彫刻の表現を「技術力の衰退」ではなく「地域的特徴」とする指摘もなされているが、カーピシー派全体を再評価するには至らず、未だ学界に受け入れられていると言い難く、具体的に広義ガンダーラの他の地域とカーピシー派がどのような関係にあるのかを検討する必要があると考えられる。そのための具体的な方法として、カーピシー派にも散見される、仏坐像や弥勒菩薩坐像の台座や釈尊入滅のエピソード「涅槃」囿中に釈尊が横たわる台座の左右に獅子の脚部（あるいは獅子そのもの、獅子の頭部と脚部を組み合わせたもの）を配する“獅子座”“獅子牀”と呼ばれる台座を取り上げる。これは西アジアに起源する玉座に由来し、広義ガンダーラやインド中部マトゥラーで仏教美術に取り入れられたものであるが、その獅子脚部のカーピシー派における様式的編年と、狭義ガンダーラなど他地域の獅子脚部を比較することで、広義ガンダーラにおけるカーピシー派仏教彫刻が、後期～末期ではなく、むしろガンダーラ盛期にまで遡りうる可能性を指摘するとともに、ガンダーラ彫刻編年解明の一助となることを目指す。

(うえはら・えいこ)